[COMMUNION]
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

コミュニオン

第３３号
（通巻１２６８号）
2016 年 10 月 30 日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

《教区フェスティバル２０１６　説教》

被災者支援から学ぶ「丁寧な牧会」

九州教区主教　ルカ　武藤　謙一

4月14日(木)午後9時26分、マグニチュード6.5益城町で前震と呼ばれる震度7の最初の大きな地震が発生、28時間後の16日(土)午前1時25分には、マグニチュード7.3益城町、西原村で震度7の本震が起こり、50名の方が直接地震によって亡くなるなど多くの被害がでました。

九州教区では16日（土）午後に福岡で緊急会議を招集し、被災者支援室設置を決定。17日（日）主日礼拝後、教役者や信徒が熊本聖三一教会に集合し、18日(月)から何組かに分かれて信徒宅訪問などを始め、その間にも支援室体制を整え、4月末からボランティアを受け入れ、「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。」と言うロマ書8章のみ言葉を支えとして本格的な支援活動を始めました。

まさに青天の霹靂、考えてもいなかった被災者支援活動です。比較的早く被災者支援室を立ち上げることができたのは、日本聖公会の今までの経験から、一つのマニュアルが届けられていたからです。それによると、災害の規模や特徴によって異なりますが、先ず信徒訪問をし、安否確認、同時に信徒の近隣、周囲の状況やどのような物資や援助を必要としている人がいるかを調査するというものでした。

今回の特徴は被災地域が益城町や南阿蘇村などに限定され、また現在までに2千回を超える体に感じる地震、余震が長く続いていることです。そのため不安が継続し、前向きになれない人々が多い、建物などの被害判定が確定せず、なかなか修理、改修する気持ちになれないことなどがあります。九州地震被災者支援室では、この5ヶ月間、延２２０名の方がボランティア登録してくださり支援活動を行なっています。町を歩いて声をかけて、自己紹介し、お話を聴き、素人ですができることがあればお手伝いすることを伝え、実施する。最初は何者か、と遠慮される方も信頼を得られるとまた次の依頼をくださったり、近所の方が作業を見ていて、ご自宅の作業を依頼してくださったりと、現在では主に被害が大きかった益城町を中心に、少しずつですが、地域の人たちとの関係が生まれ、また新しい出会いにつながり、被災者の方々との関係が深まり、また広がりつつあります。

もちろん、限界を感じることも多くあり、ボランティア参加者や関心を持って見守っていてくださる方から励ましと同時に批判や叱責もいただいています。例えば情報発信、フェイスブックで日々の活動報告をしていますが、誰もが見られるわけではありません。何をしているのかよく分からないと言われます。ボランティア活動の責任者も、専任のスタッフを置くことができず、3人が交代。そこにも課題や限界はあります。教区の被災者支援室ですが関われる教役者や信徒が限られてしまいがちであることも、私にとっては気になることです。

私は可能な限り週に1度は熊本に行くように心がけています。ボランティア活動はできなくても夕方の振り返りの時間を一緒に過ごしボランティアやスタッフの話しを聞くようにしています。熊本に行ってよく分かること、本当にありがたいと思うことは、「誰も孤立させない」、「愛を分かち合う」、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」、そんな思いで皆さんが心を込めて、丁寧に奉仕し、また被災された方のお話を聴くように心掛け、一人暮らしの被災者の方や気になる人を用事があっても無

くても訪ねて声をかけていることです。

瓦礫や倒れたブロック塀を撤去すること、長い間それらを見ながら日々を過ごしてきた被災者の方にとっては単に瓦礫が無くなっただけではなく、精神的にも一つ重荷が軽くなり癒されることのようです。庭の草取り、これも被災者支援なのかとの疑問もでてきますが、被災後に、その気力が湧いてこない、でも草が伸びているのは毎日気になる。そういう方々の「猫の手」でいいじゃないか、という気持ちで関わっています。

被災された方々、またボランティアの方々と接していて、こうした被災者支援の活動は、まさに教会の宣教・牧会の働きそのものである、という思いが次第に強くなっています。普段の教会の働きとは全く関係のない、災害時の特別な被災者支援活動ではなく、日々被災地でなされていることは、まさに2012年の日本聖公会宣教協議会提言に示された「丁寧な牧会」なのだと理解しています。この活動が終わったとき、ボランティア活動を通して出会った地域の皆さんとの関わりは、熊本聖三一教会の牧師や信徒たちによって継続され、その交わりがより深まり豊かなものになると信じています。何故なら、この活動が教会の働きそのものだからです。

教区の召命黙想会の講師として北海道教区の大町信也司祭をお呼びした折り「丁寧な牧会」について六つのポイントを挙げてくださったことがありました。それをヒントに被災者支援活動から私が教えられたことは以下のことです。

「丁寧な牧会」とは、第一に、霊的なものであること。例えば家具の整理や不要品の廃棄というようなその人の現実的な必要にのみ応えるのではなく、そのことを通してその人の心や魂に届く働きかけであることです。そのためにはその方の思いをよく聴くことが大切になってきます。良く話しを聴くためにも、第二に継続的であることが必要です。ボランティア活動では、夕方少しのおかずや飲み物を持って声掛けを行います。「あなたのこと、忘れていませんよ」という想いで何軒かを訪ねます。頼まれた作業が終わったら、それで終わりでなく、また連絡を受身的に待つのではなく、繰り返し訪ね、安否を問い、良く話しを聴きます。その中から新たな必要を知ることもあるのです。また「丁寧な牧会」を行うため、第三に協働的であることが大切です。ボランティア活動は多様で、若い力が必要な時もありますが、女性の一人暮らしの方の家の片付けなどは婦人たちのほうが相手の方も安心します。私たちのボランティア活動は基本的に素人の奉仕ですが、専門家の力が必要な時もあります。「丁寧な牧会」をするためには一人ではなく、多様な賜物を持った人たちが協力して必要に応えていく働きが大切です。

被災された方々との出会いを通して参加したボランティアの人が変わることがあります。Y君という17歳の男性は聖公会の信徒ではありませんがすでに何回もボランティアに来ています。最初は無口でおとなしかったのですが、会うたびに彼が生き生きとしているように見えるのです。必要とされているという思い、感謝される喜び、ボランティア同士の交わり、そんなことが彼を変えていったのでしょう。

このように「丁寧な牧会」は、自分自身が変えられる体験でもあり、一方的に与える者と与えられる者という関係ではなく、相互的なものなのです。今熊本で行われているこのような「丁寧な牧会」がそれぞれの教会で教役者や信徒によってなされるならば、きっとそこには主の平和による生き生きとした交わりが生まれることでしょう。

今日の福音書は復活されたキリストが弟子たちに現れて聖霊を授け、弟子たちを遣わす場面ですが、主イエスは受難の直前に「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。」（ヨハネ17：21）と祈ります。そのための十字架の死と復活なのです。復活のイエスが弟子たちに聖霊を授けてこの世に遣わすとき、今日の福音書の続きですが「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」と言われます。そのために弟子たちはこの世に遣わされるのです。罪を赦す、赦さないとはどういうことでしょう。弟子たちが、あなたは有罪、あなたは無罪と、裁判官のように人々を裁くということではありません。そうではなく、神から離れた人、他の人たちからも孤立している人、あるいは別れ争っている人たちに対して、神との和解、人と人との和解の業を行い、キリストの死と復活によって与えられた永遠の命、神と人、人と人とが一つとなる神の家族の交わりに招き入れるようにしなさい、ということだと理解します。そのために私たちは招かれており、主キリストの体と血によって養われ、聖霊の息吹を受けて、遣わされるのです。

教区フェスティバル2016

9月19日の敬老の日、台風16号の影響で、いまにも雨が降り出しそうな空模様の中、香蘭女学校に約800名の老若男女が集まり、共に聖餐式を捧げた。午後からは、場所は校庭からアリーナ（体育館）に変更になったが、60以上の教会と団体が参加し賑やかにバザールを開催、楽しいひと時を過ごした。

「礼　拝」

司祭　倉澤　一太郎

今年の教区フェスティバルの聖餐式は九州教区の武藤謙一主教を説教者にお迎えし、大畑喜道主教の司式によって執り行われた。昨年は8つの会場に分かれる形で行われたため、東京教区の信徒・教役者が一堂に会して主の聖卓を囲むのは2年ぶりであった。今回の聖餐式では日課朗読を中高生世代キャンプ、教区青年会、一粒の麦の会の方に、代祷を各教会グループの代表者、聖歌奉唱には子どもと大人、香蘭女学校の3つのクワイア、また祭壇奉仕には香蘭女学校と三光教会のアコライト、三光教会オルターのご奉仕を頂いたほか、会場ボランティアの方々など、本当に多くの方のご協力によって聖餐式をお捧げすることが出来た。

それぞれの力は小さいが、主イエスに集められ、神様から与えられた賜物を出し合えば「豊かなもの」を生み出せるということを、共に体験した礼拝であった。

この先、主によって聖霊を受けた私たちは、もっと大きな働きをすることが出来るであろう。この確信を胸に、主イエスが遣わされる働きの場に出発していきたい。

「イベント」

司祭　須賀　義和

当初校庭を予定していたバザールは台風による雨が予想されたため会場が体育館に変更された。会場は雨による湿気と人の熱気で空調をかけても蒸し暑く飲み物がよく売れたようであった。

イベント部会では、「繋げる」ということをキーワードとして会場内のスピーカー増設やツイッターによる映像配信（ツイキャス）をテレビで公開するなど売り場から動けない、当日参加できないという場合に対応しようとした。雨対応による会場設定のため、焼きそばやコーヒーといった火気を使うブースは体育館脇のスペースとなったので、この場所と地下3階のアリーナとをつなぐことはできたが、会場内のスピーカーが減ってしまったことによりせっかくのアピールタイムの声が聞こえづらかったのは残念であった。

会場には60を超す出店と展示があり、美味しいお弁当や野菜、手芸品、ケーキ、本、グッズなどが売られ、色とりどり楽しいバザールとなった。

また、子どもたちのためには、ゲームをしながらスタンプを集めていくスタンプ・ゲームラリーが催され、多くの子どもたちが楽しんでいた。

たくさんの改善点や反省点があったが、これらの経験は次回に活かされるであろう。

最後に会場を提供してくださった香蘭女学校並びに搬入搬出の車両整理等で助けていただいた三光教会の方々、また多くのボランティアによってフェスティバルを作り上げることが出来たことを感謝したい。

フェスティバル委員長　香山司祭による閉会の祈り

2016夏のキャンプ特集

合同こどもキャンプ報告

7月27日から29日までの3日間、清里のフォレスターズ・キャンプ場で子どもたち45名（20教会）、スタッフ16名の東京教区合同こどもキャンプが行なわれました。

豊かなで涼しい自然の中、すべてのプログラムを滞りなく実施できましたが、大変だったのは、思ったよりぬかるんでいた険しい道を、助け合いながら進んだハイキングでした。でも苦労した分だけ、心に残ったものではないでしょうか。

今年でキャンプも5回目となりますが、今回は6年生が9人参加してくれました。この子たちが、来年の中高生世代キャンプに繋がることを願って、最後に一人ひとりに感謝状を手渡しました。

（SSネットワーク　渡辺康弘）

CCEA（東アジア聖公会協議会）青年大会報告

新妻　夏奈

7月27日から8月1日までの6日間クアラルンプールでCCEAの青年大会が行われました。今回の大会では主に、聖公会の宣教の5指標についての学びを深めました。

2日目には「指標に触れる旅」と称してバスで現地の州議会と神学校を訪問、州議会では議員の方のお話を聞き、神学校では熱烈な歓迎を受けました。いずれの場所でも他の国の参加者が質疑応答の際にとても積極的だったことが印象に残っています。

3、4日目には宣教の5指標の1指標につき1名スピーカーを招いてお話を伺いました。宣教の5指標は日本で普段生活している中ではなかなか耳にしないものですが、学びを深めていくうちに私たちが普段クリスチャンとして生活している中で当たり前に考えていることを言語化したものだということが分かりました。

最後には、今回学んだことをどのように自国に持って帰るのかについて、国毎に分かれてのディスカッション。日本では宣教の5指標に青年活動を当てはめて紹介する冊子を制作しようと考えています。

3日目の夜にはcultural nightが行われ、それぞれの国が自分の国の伝統的な歌、踊り、衣装を着たりして、参加者全員で大いに楽しみました。日本チームは、法被や浴衣を着て、「ようかい体操」を披露！日本のアニメは海外にも広く知られており、私たちのパフォーマンスは多くの人の心に残ったようです。

5日目は日曜日だったのでいくつかのグループに分かれて現地の教会で聖餐式に参加してきました。私はHTBBという名の新しい教会に行きました。伝統的な礼拝堂と聖餐式を想像して出発しましたが、実際には綺麗なビルの屋上にある近代的な礼拝堂でした。礼拝形式もとても斬新で、歌い手がギターを持って舞台の上に立ち、みんなでひたすらに歌を歌うというライブのような礼拝でした。イギリスから伝来した形式とのことです。「礼拝」というものを考えさせられる良いきっかけとなりました。他のグループもそれぞれの教会で様々な経験をしたようです。最後の閉会礼拝では、マレーシアの主教による気持ちのこもった情熱的なメッセージとお祈りによって大会が閉じられました。

CCEAに参加して

鈴木　由美

私たちが日々生活している社会は、キリスト教まして聖公会とは無関係なことが多いです。そんな日常生活で埋没してしまいがちな信仰を、今までは見えないものとして捉えていました。

5Marks（宣教の5指標）とは何かこのCCEAの会合まで私は聞いたことがありませんでした。5Marksは、文字にすると堅苦しく、わかりにくいもののように思えました。しかし、実は単純なものであると気付きました。それは、まさに私たち自身のキリスト者としての生き方を非常にわかりやすく成文化し、見えなかった信仰を見えるようにしたものだということです。祈りは信仰を顕すものです。5Marksには祈りが込められています。私たちが生きていくには、たしかな指針が必要です。5Marksは信仰の指針となります。これが、世界中に広がる聖公会の仲間たちと同じ時を、同じ祈りを共有できたこの8日間で得た結論です。5Marksについて、まだまだ認知度が低いです。これからの信仰生活において、祈りを目に見える形で示した5Marksは欠かせないものであると考えます。5Marksが日本で広まり、私たちの信仰生活が豊かになることを望みます。そのために今私たちができることは何であるか、継続して考え、行動していくことの重要性を認識しました。

全国青年大会に参加して 9月8日～11日・北海道教区にて

藤堂　順平

全国青年大会が終わり、自分の住む町に戻り2週間が過ぎ、まず頭に浮かんだのは全国青年大会のテーマであった「見よ、兄弟がともに座っている。なんという恵み、なんという喜び」でした。それぞれ、違った境遇で育った人々が神様を信じているという共通点でつながり一所に集い、食事をし、学び、礼拝を捧げられたことがとても貴重な時間だったように思います。

4日間の交わりの内、特に印象的だったのはやはりアイヌ文化についての学びです。平取文化センターでのムックリ（アイヌの伝統的な楽器）作成に始まり、広谷和文先生の「アイヌモシリに生きる―人間の静かな大地―」に書かれていた北海道の「歴史」についての資料や展示を北海道博物館で見たこと、知里幸恵さんの生涯を描いた一人芝居「神々の謡」を鑑賞し感じたことを分かち合いました。

「神々の謡」では自らの民族のアイデンティティーであるアイヌ語を後世に残そうと決意し、文字に記すことを実行した知里幸恵さんの人生が描かれていました。口承文化であったアイヌ語を文字として残そうとしていることに対する罪悪感に苛まれながら、しかし「アイヌ語を守り遺していく」使命が自分には与えられていると思い、苦しみながら「アイヌ神謡集」を記していく過程を一人芝居と言う形で女優の舞香さんが表現されていました。最後に、自分が感じてきた苦しみは「アイヌ語」を後世に残すために必要だったと自らを受け入れるシーンがとても感動的でした。

宿舎に戻りグループに分かれて感じたことを話し合っているとき、皆に共通した思いは「北海道、アイヌ文化（人）についてちゃんと知らなかった、まず「知る」ことが大切なのではということでした。そして自然と共に生きてきたアイヌの方々から自分たちは様々なことを教えられているのではということ、さらに現代を生きるキリスト者としてどのように生きていくべきかにまで話が及びました。

特に重要だと思ったのは、アイヌの方々が被ってきた辛く悲しい「歴史」を自分たちは本当の意味では理解出来ないということを忘れないでいようと話し合ったことです。「過去」と「現在」は切り離して存在することが出来ず、連続していることを忘れずに、その上で「未来」をどのように築いていくか、を真剣に考えていくこと、その為にはどうしても理解できないことがあるということを認めることが大切であり、それが第一歩なのではと率直に思いました。そのことを「事実の前に立ち尽くす経験、キリスト者はいつも自分の立ち位置を問われているんじゃないか」とメンバーの1人が表現していたのがとても印象的でした。

下之園　あさこ

今回、北海道で行われた全国青年大会に参加させて頂いて沢山の事を学び、多くの方と出会うことが出来ました。

北海道では主にアイヌについて学びました。今まで私はアイヌについてあまり知らず、学校で少し習った程度の知識しかありませんでした。その為、今回参加するにあたり頂いた事前資料を読んだり、その他のアイヌに関する資料も少し読みました。そのほうが行った際に理解が出来て、より深く知れると思ったからです。

そして実際にアイヌ文化センター等に行き、素晴らしい公演を観て、いかに私達がアイヌについて学べていないかを知ることが出来ました。この機会を経て、東京で行われている『シロカニペ祭』を知り、行くことも出来ました。日本人として日本の歴史を正しく学ぶべきであり、辛い経験をしてきた方々

コプティ司祭来日講演「ヨルダンでの難民支援」

この夏、中東聖公会のヨルダン、アンマン市街の聖パウロ教会牧師であるコプティ司祭から、シリアやイラクからの難民に対する具体的な支援活動を聞く機会が与えられました。

支援は教会の近くの修道院や住宅にシリア難民が暮らしていることに気づき、訪問を始めたことがきっかけで、現在は以下のことを中心に支援されています。

・避難民に最も喜ばれる支援は食糧クーポンと医薬品の提供です。

・教会の日曜学校には、ヨルダン、シリア、イラク、エジプトの子どもたちが参加している。活動の目的は子どもたちを精神的に支え、友だちづくりの場を提供することです。

・女性の集いを毎月開催し、医者、カウンセラー、教育者などの専門家から話を聞き、女性自身と家族の役立つ方法を見つける支援です。女性や母親が元気であれば、家族みんなが元気になれると、信じています。

・就職活動の支援や英語教室（欧州の国を目指す人々には、ビザの取得にそなえるため）を開いています。

教会では、避難民を教会の一員としてあたたかく迎え、主日の聖餐式、聖書の学び、聖地巡礼などを共にしています。今や、彼らは聖パウロ教会の家族であるといえます。

私たちへの要望は、難民とその支援者のために祈ること／中東特にシリア情勢についてマスコミ以外から情報を入手すること／経済的な援助／危機の解決の最良の方法は戦争を止めさせること。そのために、世界に訴えてほしいなどです。

このような要望に対して私たちはどう具体的に答えられるのか。置き土産は大きく、重いものですが、留まっているわけにはいきません。

今夏発行された2016平和メッセージとサラーム・パレスチナ2号が理解の一助になるでしょう。

この講演は、困難に直面している方々へのボランティア活動に最も大切な視点が盛り込まれた内容でした。

広報委員　前島　恵

の為にも決して無視してはいけない出来事だと感じます。

田中　萌実

聖公会の信徒であり、アイヌの信仰の口承歌「ユーカラ」を金田一京助のもとで『アイヌ神謡集』にまとめた知里幸恵さんの生涯を描いた一人芝居を観ました。彼女は土着の信仰とキリスト教、日本との間で葛藤した人でありました。その後、分かち合いを通して、アイヌ人、和人という捉え方の違和感に気づきました。そこで「アイヌの人が苦しんだ」のでなく、「人が苦しんでいる」という視点が、すべてにおいて必要だと気づきました。

青年大会に参加して、数多くの信仰を共にする人たちに出会えたことに感謝しています。全国津々浦々、また海外からも集まってきた人々は、それぞれの「物語」を持って、置かれた場で信仰を守っていました。そして、この出会いは、神さまにあってひとつにされた天の教会を象徴していると感じました。その温かさは、以前から神さまにあってつながっていたことを実感させてくれ、キリスト者であることの喜びを感じました。

《信徒リレーエッセイ》

開かれた教会をめざして

浅草聖ヨハネ教会　池田　信己

浅草聖ヨハネ教会は、去る9月25日、浅草宣教開始140周年（教会創立125周年）の記念式典を行い、150周年に向けて、新たな一歩を踏み出すことになりました。

当教会は、本年度より初めて定住牧師が不在となりましたが、上田憲明管理牧師、中村淳副牧師の御尽力に助けてもらいつつも、信徒の教会員の自覚の深まりも含めて新しい模索の段階だと感じています。

最近のトピックスとしては、バリアフリー化の一貫として、車椅子の方も使える『誰でもトイレ』の新設を含むトイレの大改修を終えたところです。

日曜給食活動も、他教会等の御協力もあり毎日曜日、1回平均250人の路上生活、生活困窮者に、ささやかな配食と交流が続けられています。

また、当教会の同じ建物の中にカフェ・エクレシアという喫茶店があり、テゼの黙想会など様々なプログラムにより未信徒・求道者の方とも交流の機会が多くあります。

私は、新たな一歩が、より開かれた教会へとなるよう、祈り続けたいと思います。

アコライト研修会開催に向けて

礼拝音楽委員会では、12月3日、高橋宏幸司祭を講師に迎え「アコライト研修会」を開催します。これに先立ち、教区内の各教会および礼拝堂の「アコライト奉仕状況」に関するアンケート調査を実施しましたので、ここにご紹介します。

研修会では、教会毎に異なりがちな、形式的・技術的側面を越え、アコライトの歴史や役割、各所作の意味、礼拝前後の過ごし方、指導法、また本アンケート結果をもとに、各教会の現状や課題の分かち合いなども行います。アコライトは、子どもや若者の奉仕と捉えられがちですが、アコライトという器の捉え方を皆で見直す機会にもなればと考えています。

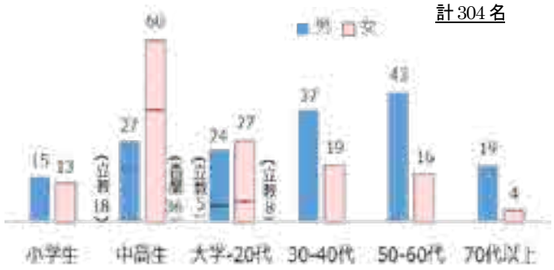
現在ご奉仕中の方はもちろん、ご興味のある方、また聖職を含め指導的立場の方もぜひご参加ください。10月末に改めて各教会へご案内します。

★回答教会・礼拝堂

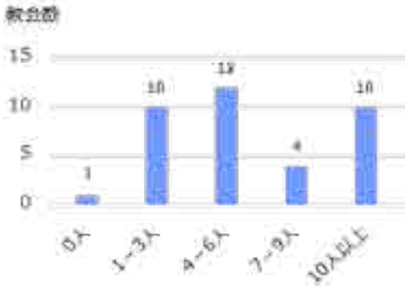
小笠原聖ジョージ教会を除く32教会及び5礼拝堂（聖路加・立教諸聖徒、立教女学院、香蘭女学校、滝乃川学園）

★教区全体におけるアコライト奉仕者の数（年代／男女別）

計304名

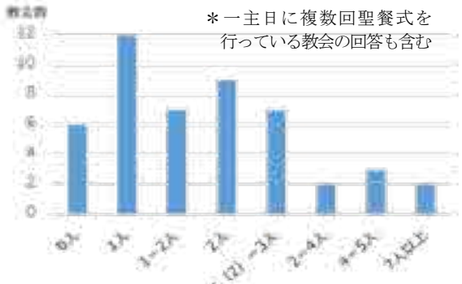


★教会毎の奉仕者延べ人数



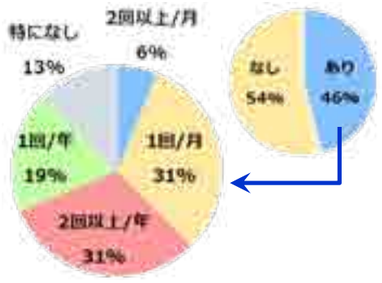
★主日における聖餐式の回数

★聖餐式での平均奉仕人数



＊聖餐式以外でも、半数以上の教会で復活日、降誕日、聖週、み言葉の礼拝、逝去者記念礼拝などでアコライト奉仕が行なわれている。葬送式はわずか。学校では入学・卒業式、感謝礼拝などの学校行事で奉仕。

★アコライトギルド、グループの有無と会合頻度



＊奉仕者はいるものの「ギルド（グループ）」化されていない教会は19教会にのぼる。

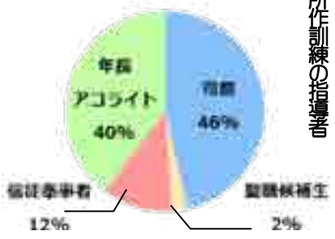
＊一方で、グループ的なものはあっても日常的な集まりがない教会も多い。

＊会合の内容は、当番決め・所作確認・勉強会など。

★所作訓練の頻度

＊「ギルドなし」と回答した教会でも所作訓練は行われているところが多かった。

★所作訓練の指導者



★困っていること

★研修の希望

世界の聖公会ニュース（2）

・北マラウイの主教、ランビヤ語新約聖書完成に「ペンテコステのよう」

12年の翻訳プロジェクトの結果、ランビヤ語の新約聖書が完成した。２０１８年に旧約聖書が完成する見通し。ファニュエル・エマニュエル・マガンガニ主教は「マラウイのあらゆる言語で神の言葉が語られるのを聞くのはさながらペンテコステの出来事のようだ」と語った。（7月29日）

・ヨークの大主教、ジンバブエ大統領に退陣勧告

大主教はロバート・ムガベ大統領に対し、退陣するよう再度勧告した。センタム大主教はＢＢＣテレビのインタビュー中に、ムガベ大統領が権力を握っている限り二度とカラーを身につけることはない、と言ってカラーを切り刻んだことで有名。（8月3日）

・ルワンダ聖公会、マザーズ・ユニオン50周年を祝う

教会において祝会が行われ、オネスフォホレ・ルワジェ大主教みずから歌と踊りの中で会衆をリードした。ゲストの大統領夫人ジャネット・カガメは、ルワンダ再建における母親の果たした役割を重要視し、箴言を引用して「男は妻を尊重するように」と勧めた。（8月8日）

・ブラジル聖公会、先住民と共闘

先住民に対する強制退去や虐殺が起こっているマトグロッソ・ド・スル州議会前でデモを行い、先住民問題への支援を呼びかけ、州法務長官と先住民コミュニティの代表者との面会が実現した。教会は先住民の権利を守る闘いへの継続的でエキュメニカルな関与を約束した。（8月19日）

・オークランド・セルウィン主教礼拝堂、１７５年かけて完成

聖三一主教座聖堂の礼拝堂は建築作業が終了した。アウグスト・セルウィン主教がイギリスからこの地に到着し主教座のための土地を取得したのは１８４２年。ロス・ベイ主教は「１７５年の夢と60年の工事の末に、我々は２０１７年の聖堂聖別を迎える用意が整った」と語った。（8月22日）

・最高齢のマオリ首座主教、来年3月に引退

アングリカン・コミュニオンで最高齢の大主教であるウィリアム・ブラウン・トゥレイ大主教は、２０１７年3月に92歳で引退する。在職65年。トゥレイ大主教は、アオテアロア（マオリ）、ニュージーランド及びポリネシアの各文化を代表する3人の並立首座主教の1人でアオテアロアの首座主教。（8月23日）

・南アフリカ聖公会、同性婚への祝福を拒絶

同性シビル・ユニオン（婚姻に準ずる法的関係）に対する祝福を検討したが投票の結果、否決された。動議では、聖職者はＬＧＢＴＩを自認する者への牧会に特に備えるべきであるが、それを望まない牧師にそれを履行する義務はない、とされていた。（10月3日）

【新刊・子どもの初陪参の準備のために】

『おいで子どもたち』

文　斎藤　惇夫
写真　田中　雅之
発行　日本聖公会

今年日本聖公会第61（定期）総会にて、堅信前の陪餐の実施が決議されました。それによってさまざまな変化が教会で起こります。そのひとつが、ある一定の年齢になった子どもたちが教会での学びを経て初陪餐を迎えるということです。子どもの初陪餐の準備のための小さなフォトブックが出版されます。

児童文学作家の斎藤惇夫さん（元福音館書店編集責任者）の聖餐にあずかることの素晴らしさを語った詩と、なにげない教会生活の風景を切り取った田中雅之さん（フリーランスのカメラマンとして活躍）の美しい写真とで構成された小さな絵本です。お二人とも北関東教区浦和諸聖徒教会の信徒としてこの出版に携わってくださいました。

大人にとっても、陪餐の奥深さ、そして子どもたちが教会の交わりに共に加わることの喜びに触れることができる素晴らしい本です。ぜひ子どもたちに何度も読み聞かせてあげてください。また、大人へのクリスマスプレゼントにもぜひどうぞ。

７百円（税抜き）、聖公書店並びにキリスト教関連書店にて販売。

（司祭　笹森田鶴）

◇　◇　◇

次回クリスマス号12月25日発行

ちょっと聖書、ときどきユーモア（二十七）

1.　お詫び

牧師「すみません、今日の説教は、いつもよりだいぶ長くなってしまったことをお詫びします」

信徒「先生、長くなったことは、まったく謝る必要はありません」

牧師「有り難うございます」

信徒「でも、内容については神さまに謝った方がいいと思います」

2.　パンの奇跡

先　生「イエスさまは、たった５つのパンで５千人以上の人を満腹させたのです。すごいですね、みなさんはどう思いますか」

子ども「はい先生、パン屋さんをはじめたら、とても儲かると思いました」

3.　心　配

子ども「ねえ、お父さんが大切にしているマリアさまの置物があるでしょ」

牧　師「ああ、居間に飾ってある置物だね」

子ども「お父さんは、ボクがいつか壊すんじゃないかと、ずっと心配していたよね」

牧　師「それが、どうしたんだい」

子ども「安心して、もう、心配しなくてよくなったから」

牧　師「・・・・」